

八代集抄

存
十
存
十

特別
イ 4
3163
104(10)

14
3163
104(10)



後撰和歌集卷第四

夏哥

夏哥 夏哥



くよわいなるを
まうまうと春勝を
あやうとわかれと
さきうとわかれと
青き乃経候を
こめくさうとわかれ
ういさのまを
あやうとわかれ
あやうとわかれ
まうまうとわかれ

くよわいなるを
まうまうと春勝を
あやうとわかれと
さきうとわかれと
青き乃経候を
こめくさうとわかれ
ういさのまを
あやうとわかれ
あやうとわかれ
まうまうとわかれ
まうまうとわかれ

解案云 垣州と云ふ古今
 存といふと 傳ヨメる同也

序并しうのたのむ

此乃

何事か嘆つて

（五）

まわらねらちん

明徳のあまらふ

三ノノ

孝子孫承

五ノ

夢んばあまの

時より月々雪々と云々まてり

あきわひぬづちゆんりてぬ

卯月をわ乃月をふしをわあ

あひるもいぬもあひる

月うあく ちうよまをりる

21

あひるもさぬき

多々中乃云云忍ね

三子親の月

よ創と似てゐる

親と古今子親

さきけいあちまき

わんざん

此乃

ついでに

おのれを

١٠٠

مجلس

其子孫

本之也

あつたのふもとにのちのち

伊勢

おつゝをきくそふは
えねあつてうへえうりせ

人なりてまうつりぬるゝの年うぢ

はるまじくおこつた

天竺八夜中將元曆乞年平

隠れぬともねぞう
 うも枝うつりては
 彼方みづわれと
 いふやうむのやめ
 昔のうやうも
 うも人のまじり
 くれは杜若乃と
 うも形とこれと
 芳をこれと
 家より
 うもやうらん
 僻業村云八十人
 うも人
 うも人
 うも人

いふやうむのやめ
 うも枝うつりては
 彼方みづわれと
 いふやうむのやめ
 昔のうやうも
 うも人のまじり
 くれは杜若乃と
 うも形とこれと
 芳をこれと
 家より
 うもやうらん
 僻業村云八十人
 うも人
 うも人
 うも人

いふやうむのやめ
 うも枝うつりては
 彼方みづわれと
 いふやうむのやめ
 昔のうやうも
 うも人のまじり
 くれは杜若乃と
 うも形とこれと
 芳をこれと
 家より
 うもやうらん
 僻業村云八十人
 うも人
 うも人
 うも人

いふやうむのやめ
 うも枝うつりては
 彼方みづわれと
 いふやうむのやめ
 昔のうやうも
 うも人のまじり
 くれは杜若乃と
 うも形とこれと
 芳をこれと
 家より
 うもやうらん
 僻業村云八十人
 うも人
 うも人
 うも人

朱雀院乃春宮なり
 延長元年十月廿日春宮
 春宮乃侍れぬ
 御書お 師範の頭の下
 作者部類云大春日師範
 隼人休書下預
 春のそふ人のそふのそふ
 の人そふ力そふ春
 子御そふく時そふと
 子御そふくきそふと
 子御そふくきそふと
 子御そふくきそふと
 子御そふくきそふと

朱雀院乃春宮なり
 延長元年十月廿日春宮
 春宮乃侍れぬ
 御書お 師範の頭の下
 作者部類云大春日師範
 隼人休書下預
 春のそふ人のそふのそふ
 の人そふ力そふ春
 子御そふく時そふと
 子御そふくきそふと
 子御そふくきそふと
 子御そふくきそふと
 子御そふくきそふと

朱雀院乃春宮なり
 延長元年十月廿日春宮
 春宮乃侍れぬ
 御書お 師範の頭の下
 作者部類云大春日師範
 隼人休書下預
 春のそふ人のそふのそふ
 の人そふ力そふ春
 子御そふく時そふと
 子御そふくきそふと
 子御そふくきそふと
 子御そふくきそふと
 子御そふくきそふと

朱雀院乃春宮なり
 延長元年十月廿日春宮
 春宮乃侍れぬ
 御書お 師範の頭の下
 作者部類云大春日師範
 隼人休書下預
 春のそふ人のそふのそふ
 の人そふ力そふ春
 子御そふく時そふと
 子御そふくきそふと
 子御そふくきそふと
 子御そふくきそふと
 子御そふくきそふと

ようなうちのうち
 何となく一にふよう
 ありつゝさねてひき
 ようもさうしては
 一にふよう一にふ
 かけねふふふふ
 といふふふふふ
 夢さふふふふふ
 舟さふふふふふ
 少くもふふふふ
 舟さふふふふふ
 念ふ二ふふふふ

るさへゆあゝはむこもき
えあそさりなれ

主人馬

ようきうなひはちのふりよ
えしてぬゆめうをまりわたり

友乃世より好む所あり
 人乃世より又乃あつ
 ちりり
 伊勢

伊方

[illegible]

我々よりいへば
 あつと云う事ある
 せうと云う事ある
 一つと云う事ある
 ようと云う事ある
 心あり
 一
 一

人乃
まゝに
はりて

藤原安國

伊嘉連永男
五馬權作

あつたけゆめもあひくまの目
くれし夢をもちけさはる那

讀書

心志
 神を以て別を悟る事
 心を郭云ふはして徳あり
 名を予の言ふの如き
 仁はさう唱へてありと
 陳れぬれハ伊勢物語
 ありとてくはをのまう

ちひさいあけなれ校とうりわて
 おうとしくおなのさうあゝ郭公
 うしろの竹を比郭公をまいて
 けうふわなれうけさともあやめ
 ちひさいあけなれ校とうりわて

おとていねをゆきと
 云て我をけりておと
 るを子親の指しと
 にしとていなり
 かゝるすまへ様と
 都てい様とて
 うさうやん我
 古それ別とて
 うねとて格物論
 杜鵑初別有離別之苦
 いとわうあう我を
 独めや我をよま
 こやうかまへ
 おうけけつとて
 夜月の光をて感

月をていねをゆきと
 らんていねをゆきと
 かゝるすまへ様と
 わすれられりて
 いとて
 いとわうあう我を
 らんていねをゆきと
 おうけけつとて
 夜月の光をて感

すまへ様とて
 つまね玉様とて
 ぬりぬり
 おまねわつとて
 おまねわつとて
 ぬりぬり
 えいぬりぬり
 ぬりぬりぬり
 おまねわつとて
 いぬりぬり
 常様とて
 ぬりぬりぬり
 ぬりぬりぬり
 ぬりぬりぬり
 ぬりぬりぬり

おまねわつとて
 おまねわつとて
 ぬりぬり
 えいぬりぬり
 ぬりぬりぬり
 おまねわつとて
 いぬりぬり
 常様とて
 ぬりぬりぬり
 ぬりぬりぬり
 ぬりぬりぬり
 ぬりぬりぬり

[illegible]

五

[illegible]

我やこのるもねまうし
子をこゝろ人の様子
をうへとよめるや
花を咲かせし
我やこゝろねまう
つてんとも
こゝろのるもねまう
あすのるもねまう
にさるもねまう
おすのるもねまう
とや月日も床の
うつろひ花を
も咲くさゆも
とこまよひるも
云のるもねまう

我やこれのるもねまう
をうへとよめるや
花を咲かせし
すも月日も
こゝろのるもねまう
うろりか
つてんとも
こゝろのるもねまう
あすのるもねまう
にさるもねまう
おすのるもねまう
とや月日も
うつろひ花を
も咲くさゆも
とこまよひるも
云のるもねまう

貞信公
師尹朝臣

比く我のるもねまう
をうへとよめるや
花を咲かせし
とや月日も
うつろひ花を
も咲くさゆも
とこまよひるも
云のるもねまう

時床より花を
れは花を
とや月日も
うつろひ花を
も咲くさゆも
とこまよひるも
云のるもねまう

太政大臣

貞信公

照宣公子
小栗忠平

夜更けにとも帰る
てわづれは涙の
影もちりやります
春とまゐるさう
君もとめゆす
うのーよとて花を
那とにぬきとす
もまゐるゆゑに
もまゐれさすねを
そのうらとに懶の
急ととも訓あはれ
さうちやちや
花ををぬきとす
くはるすすす
て貴人のさす我

月にはうらとあはれ
わづれは涙の
てふちやよ貴人
影もちりやります
まゐるゆゑに
かー
な原雅正
もまゐれさすねを
そのうらとに懶の
急ととも訓あはれ
さうちやちや
花ををぬきとす
くはるすすす
て貴人のさす我

もまゐるゆゑに
そのうらとに懶の
急ととも訓あはれ
さうちやちや
花ををぬきとす
くはるすすす
て貴人のさす我
もまゐれさすねを
そのうらとに懶の
急ととも訓あはれ
さうちやちや
花ををぬきとす
くはるすすす
て貴人のさす我

我とすねんひとめとる
まづ月がうらとあはれ
こゝろとあはれ
月乃霜をや秋とえん
六月後ちり川原はまづり
月乃あはれとえん
笑や川乃さうこす
まづ月がうらとあはれ
こゝろとあはれ
月乃霜をや秋とえん
六月後ちり川原はまづり
月乃あはれとえん
笑や川乃さうこす

乃まねと秋と見や
らん酒の袖乃露
けきとて酒とハ物

のち乃うろくをさうきこはせよ

ふきとて秋ハ露とけき物れハあり 1月の星ハ此露也と為家説と
かて川乃子さうこ 為家説云云被月をふしむふ富もとて
晴るう路す六月中は候宜ある時被たる也家説云云愚業今も
六月十九日より紀宮子訪くもあつた後後の録凡さうとて一ふ金
七夕ハあつた河原をのち此二十日ハ国ハ月晦日ハ世人はさう
後するはされハ七夕ハ天の河原を七座乃後せんよけ国六月晦日を
てせうとて秋出く七夕の夜をよりはされハ七夕をさひ出くわく
よめさうとて七夕ハ七座や七夕乃ねるはさうとてさうとて又
為家説云国六月とて七夕の夜をさう口明にハ七座の後せん

まやとて

惟貞乃とて 紹運録云

是貞親王 仁和賜源姓
寛平三年為親王三品
太宰帥延喜七年三月薨
光孝第二皇子是也

後撰和歌集巻第五

秋尋上

惟貞乃とて此家の尋合り

よみ人さうとて

あさくも風のすく
成ねさうハくじハ
宜也理りと云成
涼さ風のさハ秋
立目と云ハ理りと
うらけり物うろさ
うらけさハさうと
よめさうハ秋ハ本
ちりさハ物ねさ乃

あさくも風乃すくあさめさう
秋ハ月さうとてさうとて
さうとて

うらけけり物うろささ本あさ
ね乃さうとてさうとて
物さうとて秋立目人ハさうとて

時をれい人ふもあ
 し物もあはれ
 このめう一君ははれ
 のめう人つれ
 さうさういふ
 言さういふや秋
 も威ねてあは
 ぬもあはれ
 いさう物もあは
 るも物もあは
 秋の風の秋を告
 げさういふ
 あさうせううら
 うさういふ
 あく信りあはれ

このめう一君ははれ
 うらうさういふ
 およこいふ
 いさう物もあは
 秋ははれ
 いさう
 あさうせううら
 うさういふ
 大いふ
 あく信りあはれ

あく信りあはれ
 このめう一君ははれ
 のめう人つれ
 さうさういふ
 言さういふや秋
 も威ねてあは
 ぬもあはれ
 いさう物もあは
 るも物もあは
 秋の風の秋を告
 げさういふ
 あさうせううら
 うさういふ
 あく信りあはれ

あく信りあはれ
 このめう一君ははれ
 うらうさういふ
 およこいふ
 いさう物もあは
 秋ははれ
 いさう
 あさうせううら
 うさういふ
 大いふ
 あく信りあはれ

七乃為料は仕度
と調へて裁縫に

あつてもハ七夕はあま
七夕はあまハ七夕書こ
あつてもハ不似し^ス空ハ
われちる中より裁^{タテ}
縫わさハ七夕のやう
りえぞうと原氏
帚もハ七夕のころ
あふりこせのとめ
あきと契やうあひば
とこ漢^{イナ}萱^{ヨメ}氷くあ
とろりて織女二月な

しとてはうしてつれい

閑院 右京太史宗千女と

野
子
人
也

三河わさくらん

ねえとよあう

七月七日はゆきふりてうんとよい
てゆきふりてゆきふりて

練三百匹年 蒙

求ありあり

高河社人

七夕別の巻と別

色又年々公途可

紹興別子先子

のきつと何とわ

一、九五〇八七

あつちてふまをさわらわ

今更ハ必アリト云フ也

よみかたを之に

よりいふは、

そよ七夕は成てのち

一、子孫傳

三

源中正
大藏大補
苗針子

事つらくもまじりたりあまの河

二、いそよりうにひんちやん

五

主人

ふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

あまのわも母あや

七月乃日夕女乃

荻原兼之

いふまでもなく、我々がその海

ふききりうとわく

越後、美人はう
 散原敦忠 胡長
 七目、七女
 よみ人

銀はいとくはなりしをわたり
 秋乃おぬれふきしきなり
 きなりしなり
 今よりいりなりかゝるいあせらん
 うさぎ 初稿本
 うさぎもあくしわたりあむ
 よふ人きし
 あれはあれしきふしきなり
 あきしきしきしきしき
 まま 正義
 うさぎの体は水戸の海をわたり
 うさぎのあきしきしきしき

秋の夕べに
 夕陽の光を
 眺めながら
 思ふに
 秋の夕べに
 夕陽の光を
 眺めながら
 思ふに

世にふりて
 秋の夕べに
 夕陽の光を
 眺めながら
 思ふに
 秋の夕べに
 夕陽の光を
 眺めながら
 思ふに

秋の夕べに
 夕陽の光を
 眺めながら
 思ふに
 秋の夕べに
 夕陽の光を
 眺めながら
 思ふに

秋の夕べに
 夕陽の光を
 眺めながら
 思ふに
 秋の夕べに
 夕陽の光を
 眺めながら
 思ふに

秋凡の吹雪より草
乃菴をこころとあり
我よりあやうきま
はゆい
いとひかりをさね
ちりといふをけり
秋のよきやとて人
秋の野よりいさく
人誰あんとてえね
いと巨き多き
あき風のや吹雪けに
吹雪けに吹雪れに
菴原えき 九条太史是は
男中納言葛磨孫
秋くれの野もせよあ

我よりあやうきま
まらやうかりとあり
いとひかりをさね
これよりいさく
秋の野よりいさく
誰をよひひいさく
あきをりやあきけの野を
わいさくといさく
菴原えき 胡臣 富内
秋くれの野もせよあ

異五七

僻處抄云野のせよと
在りせ野のせよと
ふとせそ皆野面
のせよとふとあり
ねき屋の羽は枝織
乃きこれいさの
やとけりさりと
あやハ文也との
風をむかうねまの
そととせむ洞の
そととせむ人
秋風乃あきとて
まきとて風
波乃まきとて

いとあやをいさく
よひとあり
風をむかうねまの
そととせむ
秋風乃あきとて
あきとて風
是風乃とて
まきとて

まきとて

歌
草乃てまなぬく白玉と云ふつゝそ
秋のじとて露うらやましき

ところをわかれし男のけさひの一人の男はあひまゝとぞうのうゑを
 惜ましむとて人をもりきりてくれ我身はをりていふとて
 いらつち乃そくの身なれは誰りかともうそふのうゑを
 也業雅云いつちの刈田よふける編をいふ^と裕
 草乃いふとぬく玉八雲伝抄云草乃いふとてハ詩ハ草縷とい
 ふ物とて露ハ秋なく物なれハ秋のむすう露もうゑくと
 ありとてわしけ集はてそ秋のうゑはあふとてうゑんを
 白露とてあふとぬくといふとてうゑんをわし

秋中

延喜乃沛時と秋并やあまを
れはなるとき乃はるかな

秋芳乃一とわね。まゐらふやま
おかしうあつてゐるわらう
花をよと出あゝものを輝の野乃
まわりまわつてゐるわらう
寛平御時きさい乃まはし
合ふ
よふ人きこ

うらうらうの秋雲、
心明きうらう

女節花会 是と寛平の
此時と菊会よりいふも
合とてゆ

わさわさり我名は三ね
僻案抄云一説はハ
花ともよんんとて
同やとわらふはよ
りぬえね同くは
よあてりては
んんとて
秋の野の落葉は
もゆふふたは
よのこころ

うらうらうの秋雲、もさや
うらうのうらうとて
おきし時より女節花会

荻原真風

わさわさり我名は三ね
いとわさわさり花く

よん人き

秋の野の落葉は
うらう人あふねつや
やうとて花のうら

をききし花のうら

秋さく花はれ
後へいふは
わめらばは集の
とていふは

はなれはねはれ
近は更衣は月
別多し

母服一年暇五日。合
まきこころは
わらうの秋は
よのうらう
花をききし

秋のうらうあひわ

わさわさり里より
先帝のうらう

近は更衣
生時明
原国子
大安
唱女

はなれはねはれ
花はれ

花はれ
花はれ

花はれ
花はれ

花はれ
花はれ

花はれ
花はれ

寛平の
亭子院
乃時
あの花
乃時

去るゝ御露乃とくゝとやて
 尺せをまひて法皇御製 寛平
 去る露乃かゝるは何うか
 あまてのちやうとまゐるを
 ぬき
 いせ
 うゝゝ君と志めゆふまゐれ
 うゝゝとくゝや露乃とくゝ
 コウゴ
 大補うは露乃は
 法皇御製のほひ若輩に御補
 女中と安子の山房
 王とくゝとくゝをわりてけうとくゝ
 大大臣 九条師補公
 眞言公也

九系師補公
貞信公

おわりくさる袖さへぬきしきふらへ
霞けきいものいづやきん
な
大輔

まのふちらん霞をきふらへ
あふかきものすきわいん
ま
大天長

おこりうす露乃よみくしむたれえ
かしきあはもおもひさむらわ
る
大輔

ふゆいふらうらなけねきしきい露の

[illegible]

力

評語

巽六三

秋の風うさぎん

たもとまはかり

古今

人といふはうらなひをたてゐるなりけり
わづかに病なりきれども

かにわ我がわつるも
 らんいそとあまも
 おまかれり
 小まそらりぬ
 人い
 あつちなり
 一

[illegible]

高きせうふあつう我は
 まわくかきうひとやと
 新よりうのうおきあす

上は又氣の舞は
 名をもく明は
 なるくまはく由
 け義舞の二張ハ
 秋の落はよつり
 是れは二張ハ落
 力の上は舞の六
 心をもくもく
 落はぬ我力と
 おきぬくもく
 上は秋の舞

右大臣

病あゝね我身となりと秋のよを
 叶いとうありせおきぬあうも
 秋乃にうわひあるやよ女もの
 あまこ今とあうらふ結をうり
 男乃哥のうらをうひわたり
 くれぬまうらうり

集のそとく 秋の都入
口訣をうへ

わが袖を病うとくちる
ては乃やれとてを
勝るゝわが袖の病を
わが袖を病うとくちる
秋をまればとてを
心明しとてをいへ
とてをいへ

我者のちとてをうの
けとてをいへ
て玉ふ病くわが袖を
とてをいへ
けとてをいへ
度の上の野の秋

よふひとてを

わが袖を病うとくちる
ては乃やれとてを

秋をまればとてを
心明しとてをいへ

我者のちとてをうの
けとてをいへ

延喜乃時ういへ

書く

とてをいへ

乃病をうとてを

秋の都入

口訣

わが袖を病うとくちる
ては乃やれとてを
勝るゝわが袖の病を
わが袖を病うとくちる
秋をまればとてを
心明しとてをいへ
とてをいへ
秋の都入

とてをいへ

秋の都入

久屋朝康 康孝男

わが袖を病うとくちる
ては乃やれとてを

書く

秋の都入

とてをいへ

秋乃他れ月のおと
 月乃程の夜よこ賈
 鳴りくるニ掉空波屋月
 舩厭水中天土老目託
 月を底の月れ上りわこ
 舟の竿よりさへ

少也

服乃海ううなる月をさるる
 波あゝとつるもかゝるゝと
 是

唯^是貞乃御子の家世并合ふ

よひとちり

秋乃我れ月のひかり
心乃我れ心は金
乃これなるより
はるなる世の人のあはれ
きりりなるより
うるるー又嘆^ナ慕^ム曲^ク心
あきの月常はわ照
やふふなる君といふ不音
はあひたるより
さよー百人はあふ
中よりあふ我れ

秋乃我れ月のひかりをまかせぬと
 いとれゝる乃らまゐてゝさす
 あき乃月常らうやゝてゝものあり
 やみうするをまゝらさうや
 八月十六夜 荻原素子
 雅正

わきくゝいふにやうきさるゝ
よき人ちと
月ひきおちいかり秋のう

わきく足ゆはるあぢわたり

紀游之始

參淺

[illegible]

月乃かつるにあらうね

𠂔

高きていさよもわづね月歌を
しめぬ秋乃常とこそ思れ

上人書

あま乃川きうきうけてとめらん

何すあゝ月やよと

枯風之波やうへんある川

わさばくもあく月乃あく

聖天子

すいおぢやとちりまきわらう

方家

きく子物上秋乃るるる

幸ふ川乃幸らるるれ

幸ふ川乃幸らるるれ

夢醒てやうなめいよ
 くらやみの暗がれ
 みゆきまじりてあふ
 こころをささぐる
 ときぞ一葉のしずく
 せきつたのひれりて
 夢醒るまはりのにほ
 りけりやうとてあふ
 ちかひけりてあふ
 このまじり

夢醒てやうなめいよ
 くらやみの暗がれ
 みゆきまじりてあふ
 こころをささぐる
 ときぞ一葉のしずく
 せきつたのひれりて
 夢醒るまはりのにほ
 りけりやうとてあふ
 ちかひけりてあふ
 このまじり

夢醒

夢醒てやうなめいよ
 くらやみの暗がれ
 みゆきまじりてあふ
 こころをささぐる
 ときぞ一葉のしずく
 せきつたのひれりて
 夢醒るまはりのにほ
 りけりやうとてあふ
 ちかひけりてあふ
 このまじり

夢醒てやうなめいよ
 くらやみの暗がれ
 みゆきまじりてあふ
 こころをささぐる
 ときぞ一葉のしずく
 せきつたのひれりて
 夢醒るまはりのにほ
 りけりやうとてあふ
 ちかひけりてあふ
 このまじり

夢醒

よきものゝ
花すもよものなれば
思ふ秋のふり
独断のふり
さすすにや秋の
つゝも悲情を
るすもよもの
花すもよものなれば
思ふ秋のふり
独断のふり
さすすにや秋の
つゝも悲情を
るすもよもの

さすすにや秋の
つゝも悲情を
るすもよもの
花すもよものなれば
思ふ秋のふり
独断のふり
さすすにや秋の
つゝも悲情を
るすもよもの

居るもよものなれば
思ふ秋のふり
独断のふり
さすすにや秋の
つゝも悲情を
るすもよもの
花すもよものなれば
思ふ秋のふり
独断のふり
さすすにや秋の
つゝも悲情を
るすもよもの

さすすにや秋の
つゝも悲情を
るすもよもの
花すもよものなれば
思ふ秋のふり
独断のふり
さすすにや秋の
つゝも悲情を
るすもよもの

秋をよらうれわす
尾をゆく秋の刺腸
とほほとほほとほほと
の音をよらうれわす
こころをよらうれわす
これだけとく尾ね
すきとよらうれわす
とくとくとくとく
たのえ尾の尾の
ゆゆとくとく
ゆゆとくとく
尾をゆとく
て様尾にゆゆの
はゆとく
秋とくとく

秋をよらうれわす
よのお人乃やとよらうれ
これだけとくとく
おとくとく
ゆゆとく
とく秋とく
秋とく
こころとく
ひとく
おとく

人乃りもよらうれわす

はね

こころとく
はねとく

おとく

おとく

おとく

こころとく

こころとく

おとく

所
有
十
五
是
年
之
上

五十七 左府入寄

ever, and that

[illegible]

敬原忠房朝臣

せがくより必唐のうゝお唐のよむとてすけりあねいそ宗
 ねをいひしんてい
 兄さうは秋にい
 いあうちなるや
 けりあうちなるや
 立田山乃目ふ秋乃
 氣あをえすさあ
 山もさういふ言の立
 也天事と云何のた
 意も言ふおあ
 とうひれいあやち
 けりさういふ言の立
 入休山祖馬の言の
 るなふさう乃秋乃
 君とわれいせの山
 妹青山紅伊いせと

兄さうは秋にい
 いあうちなるや
 けりあうちなるや
 立田山乃目ふ秋乃
 氣あをえすさあ
 山もさういふ言の立
 也天事と云何のた
 意も言ふおあ
 とうひれいあやち
 けりさういふ言の立
 入休山祖馬の言の
 るなふさう乃秋乃
 君とわれいせの山
 妹青山紅伊いせと

と見とううて同胞
 乃中い津果あ
 の眼を味しあ
 とうさうさうい
 心明く通照の
 意さうの言や
 のさういふ言
 一さういふ言
 けりあうちなるや
 しあうちなるや
 兄さうは秋にい
 いあうちなるや
 けりあうちなるや
 立田山乃目ふ秋乃
 氣あをえすさあ
 山もさういふ言の立
 也天事と云何のた
 意も言ふおあ
 とうひれいあやち
 けりさういふ言の立
 入休山祖馬の言の
 るなふさう乃秋乃
 君とわれいせの山
 妹青山紅伊いせと

兄さうは秋にい
 いあうちなるや
 けりあうちなるや
 立田山乃目ふ秋乃
 氣あをえすさあ
 山もさういふ言の立
 也天事と云何のた
 意も言ふおあ
 とうひれいあやち
 けりさういふ言の立
 入休山祖馬の言の
 るなふさう乃秋乃
 君とわれいせの山
 妹青山紅伊いせと

霜ふき世令れ名や
 うゝ霜ふれいこい
 ちて身世へんとい
 秋ひきつゝもき
 霜のうゝまゐる
 霜うゝゝかき
 いふ霜うゝまゐれ
 うゝ霜のうゝま
 うゝ霜うゝまゐ
 うゝ霜うゝまゐ
 うゝ霜うゝまゐ

九月あつちの月
 あつちの月
 うゝ霜ふれいこい
 ちて身世へんとい
 秋ひきつゝもき
 霜のうゝまゐる
 霜うゝゝかき
 いふ霜うゝまゐれ
 うゝ霜のうゝま
 うゝ霜うゝまゐ
 うゝ霜うゝまゐ

九月あつちの月
 あつちの月
 うゝ霜ふれいこい
 ちて身世へんとい
 秋ひきつゝもき
 霜のうゝまゐる
 霜うゝゝかき
 いふ霜うゝまゐれ
 うゝ霜のうゝま
 うゝ霜うゝまゐ
 うゝ霜うゝまゐ

九月あつちの月
 あつちの月
 うゝ霜ふれいこい
 ちて身世へんとい
 秋ひきつゝもき
 霜のうゝまゐる
 霜うゝゝかき
 いふ霜うゝまゐれ
 うゝ霜のうゝま
 うゝ霜うゝまゐ
 うゝ霜うゝまゐ

うしろ海松布
 しみぢりぐさ
 りとふりしと
 木の葉ちる浦は
 とくちうはたし
 へそくちうねさ
 もろろー
 わるふの神より
 海神日本紀海
 ちる心のおぼや
 娘の海神より
 幣とひし
 日くくの志は
 目晚の志乃
 秋の志と

うしろしるみぢりぐさ
 木の葉ちる浦は
 とくちうはたし
 へそくちうねさ
 もろろー
 わるふの神より
 海神日本紀海
 ちる心のおぼや
 娘の海神より
 幣とひし
 日くくの志は
 目晚の志乃
 秋の志と

新原真風

月乃の志は
 日乃の志は
 秋の志と
 月乃の志は
 日乃の志は
 秋の志と

月乃の志は
 日乃の志は
 秋の志と
 月乃の志は
 日乃の志は
 秋の志と

賜すまゝにやせふ
人乃とてし給ふ。心
や^{白氏文集}是秋^天に
中^{ニハナシテ}賜^{ハナシテ}是秋^天に
わ^{ハナシテ}こゝに^{ハナシテ}お^{ハナシテ}ひ^{ハナシテ}し
秋の^{ハナシテ}出^{ハナシテ}み^{ハナシテ}こゝに
あ^{ハナシテ}す^{ハナシテ}わ^{ハナシテ}れ^{ハナシテ}ね^{ハナシテ}は
つ^{ハナシテ}け^{ハナシテ}く^{ハナシテ}お^{ハナシテ}ひ^{ハナシテ}し
こゝに^{ハナシテ}お^{ハナシテ}ひ^{ハナシテ}し
お^{ハナシテ}ひ^{ハナシテ}し^{ハナシテ}は^{ハナシテ}し
秋^{ハナシテ}の^{ハナシテ}つ^{ハナシテ}き^{ハナシテ}の^{ハナシテ}つ^{ハナシテ}き
秋^{ハナシテ}乃^{ハナシテ}は^{ハナシテ}し^{ハナシテ}て^{ハナシテ}我^{ハナシテ}を
あ^{ハナシテ}き^{ハナシテ}し^{ハナシテ}れ^{ハナシテ}て^{ハナシテ}は^{ハナシテ}し
し^{ハナシテ}り^{ハナシテ}誰^{ハナシテ}が^{ハナシテ}お^{ハナシテ}ひ^{ハナシテ}し
く^{ハナシテ}ま^{ハナシテ}く^{ハナシテ}お^{ハナシテ}ひ^{ハナシテ}し

賜すまゝにやせふ
人乃とてし給ふ。心
や^{白氏文集}是秋^天に
中^{ニハナシテ}賜^{ハナシテ}是秋^天に
わ^{ハナシテ}こゝに^{ハナシテ}お^{ハナシテ}ひ^{ハナシテ}し
秋の^{ハナシテ}出^{ハナシテ}み^{ハナシテ}こゝに
あ^{ハナシテ}す^{ハナシテ}わ^{ハナシテ}れ^{ハナシテ}ね^{ハナシテ}は
つ^{ハナシテ}け^{ハナシテ}く^{ハナシテ}お^{ハナシテ}ひ^{ハナシテ}し
こゝに^{ハナシテ}お^{ハナシテ}ひ^{ハナシテ}し
お^{ハナシテ}ひ^{ハナシテ}し^{ハナシテ}は^{ハナシテ}し
秋^{ハナシテ}の^{ハナシテ}つ^{ハナシテ}き^{ハナシテ}の^{ハナシテ}つ^{ハナシテ}き
秋^{ハナシテ}乃^{ハナシテ}は^{ハナシテ}し^{ハナシテ}て^{ハナシテ}我^{ハナシテ}を
あ^{ハナシテ}き^{ハナシテ}し^{ハナシテ}れ^{ハナシテ}て^{ハナシテ}は^{ハナシテ}し
し^{ハナシテ}り^{ハナシテ}誰^{ハナシテ}が^{ハナシテ}お^{ハナシテ}ひ^{ハナシテ}し
く^{ハナシテ}ま^{ハナシテ}く^{ハナシテ}お^{ハナシテ}ひ^{ハナシテ}し

平伊賀朝臣女

大納言天曆二年薨

彼秋のつぎのつぎ
こゝに^{ハナシテ}お^{ハナシテ}ひ^{ハナシテ}し
つ^{ハナシテ}け^{ハナシテ}く^{ハナシテ}お^{ハナシテ}ひ^{ハナシテ}し
あ^{ハナシテ}き^{ハナシテ}し^{ハナシテ}れ^{ハナシテ}て^{ハナシテ}は^{ハナシテ}し
こゝに^{ハナシテ}お^{ハナシテ}ひ^{ハナシテ}し
お^{ハナシテ}ひ^{ハナシテ}し^{ハナシテ}は^{ハナシテ}し
秋^{ハナシテ}の^{ハナシテ}つ^{ハナシテ}き^{ハナシテ}の^{ハナシテ}つ^{ハナシテ}き
秋^{ハナシテ}乃^{ハナシテ}は^{ハナシテ}し^{ハナシテ}て^{ハナシテ}我^{ハナシテ}を
あ^{ハナシテ}き^{ハナシテ}し^{ハナシテ}れ^{ハナシテ}て^{ハナシテ}は^{ハナシテ}し
し^{ハナシテ}り^{ハナシテ}誰^{ハナシテ}が^{ハナシテ}お^{ハナシテ}ひ^{ハナシテ}し
く^{ハナシテ}ま^{ハナシテ}く^{ハナシテ}お^{ハナシテ}ひ^{ハナシテ}し

あ^{ハナシテ}き^{ハナシテ}し^{ハナシテ}れ^{ハナシテ}て^{ハナシテ}は^{ハナシテ}し
こゝに^{ハナシテ}お^{ハナシテ}ひ^{ハナシテ}し
お^{ハナシテ}ひ^{ハナシテ}し^{ハナシテ}は^{ハナシテ}し
秋^{ハナシテ}の^{ハナシテ}つ^{ハナシテ}き^{ハナシテ}の^{ハナシテ}つ^{ハナシテ}き
秋^{ハナシテ}乃^{ハナシテ}は^{ハナシテ}し^{ハナシテ}て^{ハナシテ}我^{ハナシテ}を
あ^{ハナシテ}き^{ハナシテ}し^{ハナシテ}れ^{ハナシテ}て^{ハナシテ}は^{ハナシテ}し
し^{ハナシテ}り^{ハナシテ}誰^{ハナシテ}が^{ハナシテ}お^{ハナシテ}ひ^{ハナシテ}し
く^{ハナシテ}ま^{ハナシテ}く^{ハナシテ}お^{ハナシテ}ひ^{ハナシテ}し

ちるりみちをよるもふも
 故宮乃内侍コニヤ兼補朝臣也い
 かより侍る文をとりてきつ
 て内侍りはうー
 あわら身志こみみちとありふ
 たああけき乃枝うこ
 秋やみありるねれね
 ちるりみちをよるもふも
 見られねれ
 あうらもるきねを
 秋やみありるねれね

つこもろりあまきゆらん
 菊乃花おれりそて人乃良ゆり
 くれは
 よき人きこも
 けはるはるきこも
 こもきこもきこも
 菊乃花おれりそて人乃良ゆり
 くれは
 よき人きこも
 けはるはるきこも
 こもきこもきこも

山よりく
増基法師六殿上法師
なりつきの時あそびをせうて
きぬ山流りいもうるさ
十月えらわは大江子古のちよ
あらとくすわくあなれもね
ふたむきもの
めしられハゆりよしきくおね
つうりたる 散原忠房朝臣
まふちようけき錦とくもも
それともり少りてこころ

大江古
子思子

異八二

おきやもまそれとつゝなれよ
おらんひをさうやそめね
歌ふこと　よみ人
神無月よりやあふみぬの
やいとさくあくるさくす
ちやうと神の山乃拂
えられりいふはさるさわたり
仲平公時乃太臣の御殿へ伊勢と申終終の時と集る
すやね家ありよりさくさくみぬ
よりさくさくいはいけりり
枇杷太臣　仲平公

枇杷方太君
仲平公

いそ神木のさうきさ
 も時あふもさふ易さ
 人すもすられぬを
 るさく位ね家なれ
 昔さうあふさうりや
 たりも里なれどなま
 てふれいあその神
 ちもさう神まて故
 まうゆさふを合ふ
 あふさうさふさうい
 足ねらりておさう同
 乃紅さう時あふさ
 てふれいあさうい
 の一入さうりさ
 きの地乃りさうけ

人すもすられぬを
 伊集集あふさ
 けさうさうのさう
 ぬ
 集二あふさうのさう
 あふさうさうさうい
 るさうさうさうさ
 さいさうさ
 きの地乃りさうけ
 まさうおさうさう
 おや乃あふさうさ
 くれいつさうさ

序言さうの序言
 神さうさうさうい
 うさうさうさうい
 に親を結ばさうさ
 きの地乃りさうけ
 まさうおさうさう
 きの地乃りさうけ
 人すもすられぬを
 伊集集あふさ
 けさうさうのさう

人すもすられぬを
 伊集集あふさ
 けさうさうのさう
 ぬ
 集二あふさうのさう
 あふさうさうさうい
 るさうさうさうさ
 さいさうさ
 きの地乃りさうけ
 まさうおさうさう
 きの地乃りさうけ
 人すもすられぬを
 伊集集あふさ
 けさうさうのさう

月影のはなわらうに
とくさういふ事あるは
とあるは

この月れうりあも
師走の月今まで
春れとていふこと
ふとていふこと

おのころのころに
身ぶるうりうりといふ
いふいふ年のいふ

いふいふのころに
おのころのころに
おのころのころに

おのころのころに
おのころのころに
おのころのころに

いふいふのころに
おのころのころに
おのころのころに

おのころのころに
おのころのころに
おのころのころに

おのころのころに
おのころのころに
おのころのころに

おのころのころに
おのころのころに
おのころのころに

おのころのころに
おのころのころに
おのころのころに

おのころのころに
おのころのころに
おのころのころに

